

# 特別展

## 萬花図鑑の世界

### 辻永の植物画

水戸ゆかりの洋画家・辻永つじひさしは、穏やかな作風の風景画家として、また画壇の重鎮として有名です。しかし、その一方で辻永が植物に深い関心を持ち、生涯にわたって植物を描き続けたことはそれほど知られていません。

平成20年、辻家から植物画が市に寄贈されました。市立博物館では、これを記念して、特別展「萬花図鑑の世界」辻永の植物画」を開催し、寄贈された中から約600点を紹介します。日本のボタニカルアートの先駆ともいえる、美しく親しみやすい植物画との出会いは、見る人に新鮮な感動を与えてくれることでしょう。

問合せ 市立博物館(☎226・6521)

### ふくじゆそう(三段咲)



昭和10年3月

### 綴られていない植物誌

かつて辻永は、自分が描いた植物画は約2万枚にのぼると話しています。このうち、今回、市に寄贈された作品は4500点余り。明治30年代後半から昭和20年代に描かれたものが中心です。

描かれた植物は、自宅の庭や珍しい温室の花、旅先の花から路傍の草まで、その種類は多岐にわたっています。薄い和紙に鉛筆あるいは墨で主線を描き、油絵の具で彩色するという、その画法は独特なものです。これらの植物画からは、辻永の植物に対する飽くなき興味と深い愛情が伝わってくる。同時に、画家としての歩みや人生の出来事なども垣間見えてきます。

積み重ねられたこれらの絵は、綴られていない「辻永の植物誌」という作品になっているといえるでしょう。

※当初は発表を前提としたものではありませんでしたが、周囲の勧めにより、その一部を『萬花図鑑』全12巻(昭和5年〜7年)、『萬花譜』全12巻(昭和30年〜32年)として出版し、好評を博しました。



植物を写生する辻永(昭和35年頃)



辻永(1884年～1974年)

父の仕事の関係で生後まもなく水戸に移り住んだ辻永。水戸上市尋常小学校(現在の水戸市立五軒小学校)から旧制水戸中学校(現在の水戸第一高等学校)に進学し、水戸の豊かな自然の中で、絵画や植物に関心を寄せる多感な幼少年時代を過ごしました。

画家を志して東京美術学校(現在の東京藝術大学)に進学。その後、文展などで賞を重ね、戦後は日展の初代理事長を務めるなど、昭和の洋画界の重鎮として活躍しました。昭和34年には、文化功労者として顕彰されています。

ぶどううめ



昭和10年3月



昭和10年6月

とけいそう

うめ



明治41年1月

## 植物学者か、画家か…。

水戸警察署長などを務めた辻永の父は、書画や骨董こっとうを好み、また草花や西洋野菜なども育てる多趣味な人でした。そんな父の影響を受けてか、辻永も絵画や植物に大に関心を持つようになりました。

辻永が植物画を描き始めたのは、旧制水戸中学時代のようにですが、その頃、辻自身は植物学者を目指す気持ちを持っていました。しかし、中学3年生のときに、図画教師として赴任した洋画家・丹羽林平との出会いなどもあって、植物学者になるか、それとも画家の道を選ぶかという迷いの時期を迎えます。最終的には画家を志し、東京美術学校へと進学したのです。

辻永が画家になってからも植物を描き続けたことの背景には、若い頃の旺盛な草花への関心が、変わらずにあったからに違いありません。

## なにわいばら



明治43年5月

## ぎんばあかしあ



昭和6年2月



「萬花園鑑」全12巻

## 地位や肩書から離れた自分の世界

晩年の辻永は、日中に採ってきた花をコップなどに差しておき、夜になって家族が寝静まった後、その写生を始めたそうです。植物園や旅行先など、咲いているその場で描くことも少なくなかったのですが、可能なものは、こうして持ち帰り、自宅で描いていました。

深夜の画室で、コップに差した草花を前に絵筆を走らせる辻永。そこには、地位や肩書を離れ、自分だけの世界に没頭する素顔に戻った辻永がいました。

生涯をかけて築き上げた植物画の世界は、辻永という個人の内面が映し出されているのです。

## しゅんらん



明治41年3月

## じんちようげ



明治45年3月

## もも



明治40年4月

## 特別展「萬花図鑑の世界～辻永の植物画～」

期日／平成23年2月11日(金)～3月27日(日)

休館日／月曜日(3月21日は除く)

時間／午前9時30分～午後4時45分

場所／市立博物館(大町3)

料金／一般200円(20名以上の団体料金150円)

高校生以下、65歳以上、身体障害者手帳等所持者とその付添い1名は無料

問合せ／市立博物館(☎226-6521)

### 関連行事

#### ギャラリートーク

展示作品を学芸員がわかりやすく解説します。

期日／2月20日(日)、3月13日(日)

時間／午後2時から

料金／無料 ※ただし、入場券が必要